
手紙

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手紙

【Nコード】

N1898F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

望まない王になった男。彼は王としても夫としても失格だった。その彼に届けられたもとは。イギリス国王ジョージ一世のお話です。

第一章

手紙

そもそもはじまり自体が間違いだった。これは双方に言えることであつた。

彼はドイツの諸侯の一人であつた。ハノーファー選帝侯でありドイツでは大貴族と言ってもよかつた。少なくとも彼は自分をドイツ、神聖ローマ帝国の人間だと思つていた。

その彼が突如として王になることになつたのだ。歳は五十四歳でもうかなりいい歳だつた。身も心も完全にハノーファー選帝侯だつたのだ。

ところがこの時イギリスのスチュアート朝が断絶した。この国は長い間カトリックとプロテスタントの王位継承について揉めていたが彼はたまたまかつてのスチュアート朝の王ジェームス一世の曾孫であつた。母方の系列とはいえそうであつたししかもカトリックであつた。これが大きな縁となつた。

この縁で彼は突然イギリス王にとの声があがつたのだ。彼にとつては思いも寄らぬ話であつた。最初に話を聞いた時に顔を顰めさせた程だ。

「私が王に？」

「その通りです」

使者であるイギリス人が彼に恭しく述べるのであつた。フランス語で。彼もまたフランス語で応対をしている。英語の他にフランス語も話せることが役に立っていた。

「どうぞ。我等の王に」

「私はドイツ人だぞ」

だが彼は気難しい顔でこう言葉を返すのだった。見れば周りにあるものは全てドイツのものだ。イギリスのものでありそうなのは一つもない。

「それでもいいのか」

「王家の血を引いておられるのは貴方だけです」

「他にはいないのか？」

「さて」

その問いには首を捻るイギリス人だった。

「何処におられるやら。少なくともわかっているのは」

「私だけか」

「そうなのです」

このことをまた彼に告げた。

「貴方だけなのです」

「ううむ、他にはいないのか」

「お嫌ですか？」

「私は英語を話せないぞ」

このことを今はつきりと言ったのだった。

「言っておくがな」

「左様ですか」

「左様ですかではないだろう」

気難しい顔でまた語る選帝侯であった。

「確かにフランス語で多少のことは話せるが。それでも」

「御気になさらずに」

しかしそれでもイギリス人は彼に言う。

「そんなことは全く」

「気にしなくていいのか」

「はい、そうです」

イギリス人は何処までも楽天的だった。少なくとも彼から見れば。

「私共がいますので」

「君達が？」

「宮廷費も用意しておきます」

「宮廷費か」

それを聞いて彼の心がまず動いた。

「うづむ。そうだな」

「七十万ポンドです。自由にお使い下さい」

「凄い額だな。そうだな」

それを聞いてさらに心が動いた。

「だがイギリスの政治もわからないしな」

「それは我々にお任せ下さい」

要するに黙っているということだが彼にとってはそれでもよかった。何しろイギリスについて何も知らないからだ。それでどうこうするつもりもなかったのだ。

「それに関しまして」

「では私は王でいるだけでいいのか」

「左様です」

こういうことであつた。

「ただそれだけでいいのです。貴方は」

「反対派はいないか？」

彼が次に気にしたのはこのことだつた。

「私は外国人だ。その私が王になってもいいのか？」

「前例がありますし」

「前例がか」

「はい、そうです」

イギリスはかつてはノルマン公が王になつたしスチュワート朝にしろチャールズ二世の娘の夫であるオレニエ公を共同統治者として王に迎えている。欧州の王家というものはハプスブルク家を中心とした婚姻政策の影響で互いに血のつながりが濃いのである。余談であるが後のビクトリア女王はロシアのロマノフ二世とドイツのヴィルヘルム二世の仲の悪さを零していたが実は彼等は女王の血が入っていたのである。

「それもありますし。まあ」

彼を王と迎えることに猛反対し暗殺さえ考えている人間のことはここでは隠している。

「政府も議員達の忠誠を約束していますし」

「つまり政府も議会もか」

「貴方は何も心配されることはありません」

ここであえて恭しく述べたのだった。

「貴方様は」

「そうか。それではな」

「はい、どうぞ陛下」

もう王と呼んでいる。

「我が連合王国へ」

「うむ」

こうして彼はイギリス王ジョージ一世となった。しかし王となりイギリスに入った彼を見てイギリス国民達は顔を顰めさせた。それは彼自身についての問題ではなかった。

第二章

「話には聞いていたが」

「まさか本当だったとはな」

「ああ。あれは象か？」

王の側にいる二人の女のうちの一人を指差しての言葉だった。

「あれは」

「あの外見では子供が怖がるぞ」

「全くだ」

随分と酷い言い方だった。しかしそれでも彼等は言葉を続ける。

しかも王の側にはもう一人いるのだ。そのもう一人についても話される。

「もう一人もな」

「案山子か？」

そのあまりのひよる長さを見て言うのだった。

「変に痩せているな」

「随分滑稽だな」

「二人揃えば余計にな」

「全く。随分変わっている」

皆こう言い合う。誰もが顔を顰めさせているのはこれだけではなかった。

「しかも奥方はおられないな」

「まだ幽閉しているのか？」

「どうもそうらしいぞ」

実はこの二人は王の妻ではないのだ。所謂愛人である。彼は何故かこの二人を愛人にしていて常に側に置いているのだ。これがイギリス国民には甚だ不人気だったのだ。少し前にチャールズ一世という稀代の好色な王がいたせいで美人を見るには馴れていることもあったが。

「まだな」

「不倫でか」

「そう、それだ」

この王は王妃を連れてはいなかった。美人の妃だったが彼はその妃を嫌い冷遇していた。その彼女がとあるスウェーデン貴族に誘惑されたことが発覚すると彼は妃をすぐに幽閉したのである。自分の息子にまで批判されたが彼はそんなことを気にもせずそれどころかその息子を離縁してしまった程なのだ。

「それで相変わらずらしいな」

「自分が悪いじゃないのか？」

「それ言ったら下手したら打ち首らしいぞ」

「やれやれ。困った王様が来たらしいな」

イギリス国民の偽らざる感想であった。

「変なのが来たよ」

「何かと変な王様が多い国だな、我が国は」

「全くだ」

言いながら王と二人の愛人を不機嫌な顔で見ている。この王は実際に政治にはまるで関わらず二人の愛人達と遊んで暮らしているだけだった。愛人の一人がバブル騒動に関わっているという疑惑が起こりその一連の騒動の処理の為に第一大蔵卿、今で言う首相が誕生したりするが彼にとっては全く興味のないことであった。何しろ英語が話せないので公務を積極的に使用とは全くしなかったのだ。

それどころかイギリスにいることすら少なかった。ハノーヴァーに滞在することが多くそれがかえってイギリス国民の不興を買っていたのだ。

「あの人は一体何人なんだ？」

「だからドイツ人なんだろ」

こうまで言われる始末だった。しかも我が子との中はさらに悪くなる一方でそれもまたイギリス人の不興の種になっていたのである。「今度も嫌がらせらしいぞ」

「よくやるな、全く」

「絶縁したり幽閉したり」

この息子は太子になっていた。その太子が妻の肩を持っていたので随分と冷たい仕打ちを与えていたのである。それはかなりのものだっただ。だ。

「いい加減王様も許せばいいのに」

「そもそもだ」

彼等はここでいつも王を批判するのであった。

「あれだろ？王様があんな変な愛人二人ばかり相手にするからだろ」

「誰だつてそう思うよな」

「そうだよ。御妃様つていえばだ」

ソフィー・ドロテアである。彼女は絶世の美女とまで呼ばれていた。ところがこの王はその美女をまるで相手にせずあえてその愛人二人といつも一緒にいたのだ。王妃は何とイギリスにすら入つておらずドイツに幽閉されたきりであつたのだ。しかもそれが長年に渡つていた。

「あんな仕打ちされたら誰だつて不倫するだろ」

「そもそも不倫つて普通にあるだろ」

「そうだよな。それこそその辺りにな」

そういつた話が何処にでもあるのは何時の時代でも同じである。イギリス王家でもこれまでも幾らでもあつたししかもこの王以降も多々あつた。しかしこの王はそれへの処罰があまりにも冷酷であつたのだ。だからイギリス国民も彼を陰で批判しているのである。

「何十年も幽閉してな」

「幾ら何でもやり過ぎだろ」

「何考えてるんだ？」

「あんなの二人も連れてな」

「本当に変な王様だよ」

「全くだ」

こんな有様だった。王は相変わらずイギリスにはあまりおらずド

イツにばかりいてしかもその愛人二人と遊び続けていた。太子は周りの者達もイギリス国民も顔を顰めさせる程の仕打ちを受け続け王妃も幽閉されたきりであった。そして遂に幽閉が三十二年の長きに渡ったその時。王妃は遂に死の床についた。

「王妃様が危ないらしいな」

「で、王様は相変わらずか」

「ああ、相変わらずだ」

イギリス国民はここでまた王に呆れるのであった。

「今もイギリスにはおられないらしいぞ」

「政治は全部政府と議会がやってるしな」

「一体何の為の王様なんだ？」

「だからいいんだろ」

これはまさにその通りだった。立憲君主制の中でも最も近代的と言われる象徴王制だが当時は一般的とは言えないものであったのだ。だから彼等は王が政治を見ないのを不快に思っていたのだ。

第三章

「王様はさ。いるだけでな」

「いるだけか」

「だったらあんなのでもいいんじゃないか？」

この言葉には王に対する敬意なぞ微塵もなかった。このジョージ一世という王がどれだけ人気がないかということの証明になっていた。

「いればいいんだからな」

「けれどそれでももう少しましなのいなかったのか？」

「だからあんなのしかいなかったんだよ」

「こうまで言うのだった。」

「あんなのしかな」

「やれやれ。さて、御妃様が亡くなられたらどうなるかな」

「もう言うまでもないだろ」

実に冷たい言葉であった。王に対して。

「どうせ何もしないさ」

「何もしないか」

「しても碌でもないことさ」

既に王に対して全く何の期待も信頼もしていない言葉であった。

「どうせな」

「何かさ、いい加減崩御して欲しいな」

「全くだよ」

こう言い合って王の行いを見続けていた。やがて王妃は死んだ。その時王妃の周りで何かが起こったがそれを知る者は少なくとも王の周りにはいなかった。ただ王妃が死んだその事実だけが王に伝えられただけだった。すると王は冷たくこう言うだけであった。

「アールデンだったな」

王妃を幽閉しているその城がある場所だった。

「確か。そうだったな」

「その通りですが」

「ならそこでいい」

それを確認してからやはり冷たくこう言っただけであった。

「そこに葬れ。それでいい」

「ツエレルではないのですか？」

報告した者は王の側近であった。その彼ですら目を丸くさせて王に問い返したのである。ツエレルは王妃の故郷である。そこに葬らないのかと尋ねたのだ。

「あの地では」

「よい」

ツエレルでは駄目だとはつきり言っただけである。

「あの地だな。それだけでよい」

「ですが」

「これ以上は言わぬ」

やはり言葉は冷たいのであった。

「わかったな。これでな」

「はあ」

彼ももう何も言えなかった。こうして王妃はアールデンに葬られることになった。しかし多くの者がこれに納得しなかった。彼女の亡骸を密かに故郷に運びそこで葬った。この話を聞いたイギリス国民は何があっても驚かないと覚悟していたがそれでも呆れてしまった。

「幾ら何でもそこまでやるかね」

「あんまりなんてものじゃないだろ」

「何をしてもおかしくはないと思ったけれどな」

「これはあまりにも」

「ああ、酷過ぎるな」

「全くだ」

こう口々に言うのだった。しかし王は相変わらずの有様で殆ど口

ンドンにおらずドイツにばかりいてその二人の愛人達と遊んでいた。もう誰も彼には何も言わなかったがそれでも平気な有様だった。だがそうした生活もイギリス国民の嘆息も終わる時が来たのであった。一七二七年六月のことだった。王は二人の愛人とまたもや一緒に彼の故郷であり愛する地であるハノーヴァーに馬車で向かっていた。彼は馬車の中で愛人達と楽しいお喋りに興じていた。

「やはり酒はドイツだな」

「ええ、全く」

「その通りですわ」

二人の愛人達が愛想よく彼に応える。彼は二人に囲まれて至って上機嫌であった。

「ハノーヴァーに着けばまずはワインだ」

「モーゼルですのね」

「イギリスの酒とは違っていい酒だ」

イギリスに対する感情をここでは隠していなかった。もっとも最初から隠しているとはお世辞にも言えはしなかったが。

「モーゼルはな」

「それでは選帝侯様」

しかもイギリス王と呼ばれなかった。王もそれを気にする気配もない。

「ハノーヴァーでは」

「モーゼルを」

「そうだ、いつもの様に三人でな」

彼は上機嫌で二人の愛人達に語っていた。ここで馬車が一旦止まった。

「ふむ。小休止だな」

「そのようですわね」

「さて、と」

王はここでとりあえず大きく背伸びをしたのだった。実にくつろいでいる。

「ハノーヴァーでまた楽しくやるか」

こう言った時だった。馬車の中に一通の手紙が投げ込まれた。

「あら、これは」

「手紙ですわ」

「誰が入れたのか」

王はまず入れた主について尋ねた。しかし返事はない。

「誰か」

しかし返事はない。王にとっては奇妙なことだった。しかしとりあえずはよしとした。

まずは手紙を見た。するとそこにはこう書いてあった。

『神の裁きの庭において私と会うことになりましょう。裁きを受けるのは私ではなくて貴方です』

「これは……」

王はすぐにわかった。この手紙の主が誰なのか、そして何を言っているのか。全てを察した王は蒼白となり声にならない叫び声をあげた。そうしてその中で事切れたのであった。二人の愛人達は急いで王に声をかけたが返事にはなかった。王の死はイギリス国民には喜ばれ誰も悲しまなかった。冷遇されていた太子が王となり以後は真つ当に愛されるイギリス王が生まれていくことになった。

この手紙の主が誰だったのかは真相はわからない。王妃だったかも知れないし他の者、王妃を慕い王を嫌う誰かだったかも知れない。だがこの手紙が王を殺したのは紛れもない事実だ。王は死んだ、一通の手紙によって。手紙は時として人の命を消してしまうものであるのだ。

手紙 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1898f/>

手紙

2010年10月8日15時04分発行